［ 別 紙 ２ ］

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

申請者氏名　若林　剛志

本研究は、カンボジア農村家計の社会経済行動について経済的側面と社会的側面の両面から、計量経済学的手法を用いて分析を行ったものである。カンボジアの農業生産構造は他国に比べて伝統的な部分が強く残されており、農村部では所得稼得のための就業機会は少なく、村落への依存度も高い。そのような状況の中で、実態調査によって得られた様々なデータの分析を通して、以下のような点が明らかにされた。

第１に、自家消費を軸とした農家の主体均衡的な経済行動について分析が行われ、カンボジア農家の行動は稲作によって強く影響されていることが確認された。農家は家族が暮らしていくための主食である米の生産、すなわち自家消費に規定されている部分が大きい。それは、農地賦存量の少なさやインフラの未整備などからくる農業生産の低さが要因となっている側面もあるが、農産物市場の不完全性とも深く関係していた。もし同種の米について、売買のどちらにおいても価格差があまり大きくなければ、小規模農家層において中間投入財を多投し、自家消費米を確保するというインセンティブは発生しない。しかし過去４年間の調査において、米の単収は小規模層の方が高いと同時に稲作の所得率は低いことが判明した。このことから、小規模層は米生産の最適な資源配分を変化させて、購入する米を減らすために非効率な単収の増加を生み出している、という結果が示された。

第２は、社会関係資本と密接に関係する村落レベルでの協調行動についてである。カンボジアのように伝統的で労働集約的な農業生産が行われている地域では、村落の共同体的機能が強く働いており、その機能と居住者による社会経済行動との間に重要な関係があるという点について、検証が行われた。通常、市場が不完全または存在しない場合には、共同体的組織がそれを補完する機能を持っており、リスクシェアリングはその典型例である。カンボジアにおいては、モラルエコノミーの機能が村落などの共同体的組織を中心に働き、

生存維持のための消費平準化が行われている可能性が示唆された。ただしそこでは、農家の大半が自作農であることが大きく、自己の所有地を担保として信用へのアクセスが比較的容易であるという条件も重要であった。

第３に、社会経済行動を構成する個別的な事象において、協調行動を規定する最も重要な変数は交換労働であることが明らかになった。交換労働は農民による経済的な行動であり、かつ社会的な側面をもつ協調行動でもある。彼らが交換労働を重視している要因としては、それが取引費用を軽減する手段として認識されている、という論点が導き出された。例えば農民は、現金支出を抑えるために労働のバーター取引を行っている部分がある。またひとつの協調行動はフィードバック機能をもっており、そこから波及効果が発生して、様々な社会経済行動に影響を与えていることも示唆された。

以上の結果をまとめると、カンボジアの農村家計における社会経済行動は、不完全な市場に対する補完的役割を担っていると共に、規範的な意識とも相互に関係しているということになる。例えば、交換労働は経済行動と社会的な協調行動の２つの側面を含むものであり、交換労働に対して経済的効用が影響を与えると共に、満足感や信頼関係といった社会的な要素も同様に影響を及ぼしていた。また農村における社会経済行動は、防犯や生活環境の維持という公共財的なものの供給という役割だけでなく、生活の上での満足度を含めた総合的なサービスとしての機能も果たしている。農村家計の行動については、経済的側面とともに社会的側面についても十分に考慮する必要があると言える。

本研究は、従来ほとんど研究が行われていなかったカンボジアの農村経済に関して、実態調査によって得られたデータを用いて計量経済学的手法による分析を行い、農家の行動について経済的側面だけではなく、社会的側面によっても強く規定されている点を明らかにした点において、学術上の意義は大きい。よって審査委員一同は、本論文が博士（農学）の学位を授与するに値するものと認めた。